

風の末裔シリーズ・2ndシーズンの8

～木守りの実～



「ためーら、逃げんよ!! 隅々まで家捜しして、一人残らず
噛み砕いてやるからな!!」

部落の一番高い屋根の上に、雷と共に現れた、血のような真
っ赤な魔物に、村人達は震え上がった。

激しい音を立てて、村のあちこちを落雷が揺るがす。村人達
は恐れ慌てて、我先にと馬を引き出し、村を逃げ出した。雷が
後を追って唸り落ちるので、立ち止まって振り返る事も出来な
い。たちまち村は閑散、猫の子一匹いなくなる。

「ひい〜…」

屋根の上で大きく息を付いて、赤毛の少年は、掲げていた剣
を下ろした。剣のオーラで目一杯身体を大きく見せていたが、
本当はただの小さい人間の少年だ。

「やれやれ、この村で最後だよな…」

独りこちながら、屋根を飛び降りる。

「——!!」

背後に気配?!

向かって来た何かを避けて掴むと、干し草用の三本ホックだ
った。そして三本ホックの柄には、顔を真っ赤にした子供が、
くっ付いていた。

毛糸の帽子を深く被った、山岳民族の子供。自分より二三
つ年下くらいか? 怒りの目…というよりは、純粹に正義に燃
える目。

「ほ、ほくの村から出てけ——!!」

おお、ちょっと、相手してやりたい絶滅危惧種だが、今はそ
んな暇はない。掴んだ三本ホックを引っ張り、つんのめった子
供をヒョイと抱えた。

「は、離せ! はーなーせー!」

子供は空中でジタバタしたが、地面にべたりと落とされた。

「痛いー!」

「離せつつったのお前だが」

赤毛の少年は、地面にうつ伏せた子供の頭を押さえ付けて、
その顔を覗き込んだ。

「お前一人か?」

「うるさい! ころせ! お前なんかに降参するもんか!!」

「だから、質問に答えろ。お前一人か? 寝たきり婆さんを守
ろうとして…とかじゃないんだな」

「こーろーせー!!」

少年は溜め息を付いて、子供のセーターの袖を後ろで結んだ。
そっして黒鹿毛にとざりと積んで自分も飛び乗り、村を出て南

に駆けた。

「ほくをどーすんだ?! 人質にはなんないぞ! 大人達は何でも簡単に捨てるんだ!」

村から半里ばかり離れた所で、子供はそのまま地面に放り出された。

「痛い! この…!」

ここに子供は、馬上の魔物を、初めてちゃんと見た。

「…?…?…」

恐ろしい狼の化身だと思っていたが、姿形は人間の少年?

…に見える? ただ、真っ赤な髪と銀に光る目は、やはり普通ではない。

「お前…名前、教えてけ」

「ソルカだ、忘れんな!」

子供は上目で赤毛の少年を睨み付けた。灰色がかった、強い、大きな目。

「ふうん…。ソルカ、殺せとか、簡単に言うな。あと、朝まで

ここに居ろ。じゃあな」

少年はそれだけ言って、黒鹿毛を返して山の方へ駆けて行った。

「…おい…?」

ソルカは草原で転がったまま、駆け去る騎馬の後ろ姿を見送った。

「…???…何がしたかったんだ?」

村を侵略に来た魔物には違いない。自分でそう言ったんだし。だけれど、自分に手出ししなかったのは、何でだろう? ここまで運んで放ったらかしたのは、何でだろう?

分からない…分からないが、『朝までここに居ろ!』という

言葉が強く残る。あの銀の眼は強い光を放っていたが、邪悪な感じがしなかった。よく磨いた銀の匙みたいにきれいだった。

まさか、村を侵略に来た魔物なのに?

もそもそと袖から腕を抜き、戒めを解いて、そのままそこに座り込んだ。魔物の言う通りにするのは忌々しいが、何でか従ってみたい自分がいる。

大人達は、出来うる限り遠くに逃げたんだろう。あの人達、

何でも簡単に捨てるんだ…。村も、母さんも…。

—— へへへ どんくくく ——

強烈な地響きがあった。

子供は座ったまま地面の上で放り上げられた。

「?!」

月明かりに、村の方で砂塵が見える。

ソル力は立ち上がり、村へ走り出した。魔物の言い付けも何も関係ない！ 大切な宝物がそこにあるのに！

「……!!!」

裏の山がごっそり滑り落ちていた。村の大半が土砂に埋まっている。隣の部落も…山沿い全体が被害を受けている規模だ。

子供は茫然と突っ立っていた。夢じゃない、現実……! !

足がガクガクして、頭の整理がつかない。

ひとつ言える事…。こんな恐ろしいコトが起こったのに、村は無事だった。住人は無事だ。これって、偶然？ それとも？

まさか、まさか……? ?

「おう…」

後ろで声が出た。

赤毛の魔物…? が、黒い馬に跨がってそこにいた。

「ちよとどよかった、ソル力。馬の水くれ場まで埋まっちゃった。どっか、水場ない?」

まるで通りすがりの旅人みたいに気安く話し掛けられた。

「だ、だが…!」

ソル力は後ずさった。

「うーん…ちよととの間、いろいろ忘れてくれぬ? 尾花栗毛、水やんなきゃ死にそうなんだ」

魔物は困った顔をした。何だかもつ、魔物とも言えない、普通に少年の顔だ。

「……あの木の下に…素堀の井戸がある……」

「サンキュ」

少年はソル力の指差した方向へ、駆けて行った。

ソル力は村の西側に回った。

宝物は、そちらの干し草置き場の横にある。

「ああ、良かった!」

そこだけ少し高くなっていて、宝物は土砂の被害を免れて、無事だった。ほう…と、胸を撫で下ろした横を、水の入った木桶をぶら下げた、魔物の黒鹿毛が通過した。

「おい、それ、井戸の木桶! 村のモンだぞ!」

「まだ崩れるかもしれない。山から離れている」

速足で駆け去る騎馬を、ソル力は走って追い掛けた。木桶ぐらいで危険な魔物を追い掛ける事ないんだろうが、子供は木桶にかこつけて、魔物に着いて行ってみたかった。怖さより、こ

の魔物に対する興味の方が先に立った。

村から少し山側の台地で、一頭の薄い栗毛の馬が横たわっていた。首も上がらない位疲れきっていて、鼻を大きく広げて気管から変な音を漏らしている。

赤毛の魔物が馬の横に屈み込み、布を木桶の水に浸して。何とか口に含ませようとしていた。

「……………」

離れた所から、魔物のその様子をしばし見ていたソル力は、村の方向へ取って返した。

尾花栗毛は水を飲む力もなく、横になったまま腹を大きく上下させている。

「……お前、頑張ったんだな……」

赤毛の少年は屈み込んで、馬の首を撫でてやるしか出来なかった。今晚、これ以上の命を失いたくない……。

唇を噛み締めている所へ、すう……と、目の前に何か差し出された。

「……?!」

黄色い丸い大きな夏蜜柑。見上げると、真剣な目の子供が、両手でそれを差し出している。

「馬の息を整えるのいいんだ。唾液が出て、水を飲むようになる。ちょっとづつ舌先に乗せてあげて」

「……ありがと……」

少年は黄色い実を割って、少しづつ馬の口に入れてやった。馬を見つめる目が本当に優しい。やっぱりこのヒト、悪いヒトじゃない……。

尾花栗毛は夏蜜柑を口に入れてやると、目を閉じて、少し転がしてから飲み込んだ。三カケほど食わしてやった後、水に浸した布を口に近付けると、べちゃべちゃ舐め出した。そうして、とうとう首を上げて、木桶から直接水を飲んだ。

「やったあ!!」

ソル力は思わず歓声を上げた。上げてから口に手を当てて赤毛の少年を見ると、気持ち一杯な眼差しで馬を見つめている。

尾花栗毛が十分水を飲み終わってから、黒鹿毛も木桶に頭を突っ込んだ。

「お前も頑張ってくれたもんなあ……」

それから、立ち上がった尾花栗毛を騙し騙し井戸まで歩かせて、二頭に満足行くまで水を飲ませた。ソル力が、残った夏蜜柑を二頭に分けて与えた。



二頭仲良く草を食み出して、もう大丈夫だと思えてから、少年はほおっ…と息を吐いてその場にしゃがみ込んだ。顔を膝に埋めて酷く疲れた感じで、無防備に…、ソルカの存在も気が掛かっていないようだ。

ソルカはそおっと声を掛けた。

「あの……」

「ああ……蜜柑、ありがとな……」

少年は、膝に顔を埋めたまま答える。

「あの山崩れ、分かっていたのか？」

「まあな……でも、俺じゃない」

「…村のみんなを助けてくれたのか？」

「だから、俺じゃない。俺は教えて貰っただけ」

「じゃあ誰なんだ？ 山が崩れるのが分かかって、あんたに教えただの。村のみんなに言わなくちゃ。ほくたってお礼、言いたい」

「……………」

「ねえ……」

少年はゆるゆる顔を上げた。

ソルカではなく、正面の地平の皇を見つめる。

「……………じゃあ、祈ってくれ」

「…?」

その横顔は、今にも泣きだしそうだった。

「祈ってくれ……………」

不意に、夜空に細く高い声が響いた。

「鷹だ!!」

少年は弾かれたように立ち上がる。

「まさか、こんな夜中に…?!」

ソルカが眩く目の前で、本当に立派な鷹が、羽音高く少年の腕に降りて来た。

ビックリ仰天しているソルカの横で、少年は鷹の足の筒から手紙を引っ張り出して、開くのもどかしく食い入るように読んだ。そうして真上を見上げて目を閉じ、両膝からヘナヘナと地面に崩れた。

「良かった……ヨカッタ」

ソルカにはさっぱり分からない。でも村の皆を救ってくれたこのヒトが良かった事なら、きっと良い事なんだろう。

「ソルカ!!」

知った声でした。

目を上げると、いつの間に、村を離れた村人達が十数人、手

に手に棒や武器を持って、戻って来ていた。

逃げた先で同じように追い出された他の部落の面々と合流して、おかしなモノだと話し合い、地響きもあって、族長はじめ何人かで様子を見に来たのだ。

「魔物、その子から離れる! 貴様が災厄をもたらしたのか! 村をこんなにしちまいやがって!」

「ちがう、ちがう…!」

ソルカが走って行ったが、大人達の怒号にかき消される。ち…、参ったな。

尾花栗毛を連れて逃げ切れるかな…と思っていたら、何とソルカが、三本ホックを持って村人の前に躍り出た。誰かが持っていたのを、かすめ取ったのだ。

「あんた達に、村の事、言う資格ない! 簡単に村を捨てたくせに! 簡単に母さんを捨てたくせに!!」

「……………」

村人達の表情がこわばった。

事情は分からないが…ここで逃げ出すと、この子供を余計に孤立させてしまうのは分かった。

少年は、赤毛をふさりとかき上げて、前に歩み出た。たじろぐ村人達を横目に、ソルカの三本ホックを掴んで降ろさせる。

「そんなモン振り回すのは、大事な者を護りたい時だけにしとけ」

「あんたを護る為、じゃダメなのか？」

「……………」

ソルカは再度、村人に向けて叫んだ。

「みんな村から逃げてなきや、今頃この土砂の下敷きだぞ！」

村人達はちょっと怯んだ。

「そ、それは…結果だろう、偶然だろう」

赤毛の少年は、村人に正面向いた。

「俺が礼儀正しく村に向いて、これから災厄が起るから逃げなさいって口走って、あんたら信じてくれたかい？」

明朗な、よく通る声だった。人の心に届く声音。村人達は声の力に押されて黙った。

驚き見上げるソルカの横で、少年はうんざり顔だった。ここまで来たら、ちゃんと、筋道を通して締めなくてはなるまい。

面倒くさいが……………」

「すると、そなたは、…シャーマンなのか？」

赤毛の少年は、族長と対峙していた。

村人達は村の被害状況を確認に三々五々散り、ソルカはこち

らをチラチラ横目で見ながら、馬に塩と燕麦を与えている。

「あんたらが納得すんなら、それでいい。とにかく、風の神が災厄を教えてくれた。それで、俺に出来るやり方で、手取り早くあんたらを追い出した。感謝したかったら、奴にしてくれ。

俺にされても困る」

「……………」

族長は戸惑った。シャーマンだったらここで布施の要求か、少なくとも信仰を求めて来るものだが。

「しかし、神に救われてそのままと言うのは…宜しくない。礼節に欠く事に慣れてしまったら、後々の災厄に繋がる。そういう物だろう？」

「ふうん？ そういう物なのか？」

赤毛の少年は妙な納得の仕方をして、考え込んだ。

「ん・ん・ん、じゃあ、一」だけ、欲しいモンがあるんだけど」

「あ、ああ、我等は沢山無くした。だが命があればまた幾らでも築ける。なんなりと言ってくれ」

少年は口の端を上げて、親指で後ろを差した。

「こいつ」

後ろにはソルカが突っ立っていた。

「こいつが欲しい!!」

族長は目を丸くして口をぽかんと開けた。

「そりゃ、まだ……しかし、その子は……」

「見たトコ、身内いなさそうだし」

軽々喋る少年の前に、ソルルがツカツカと歩み寄った。

——ハシッ——

何か言わせる間もなく赤毛の少年の頬をはいいて、子供は激しい目を向けてから駆け去った。少年は茫然とし、族長はおろおろした後、額に手を当てる溜め息を付いた。

「あの子には地雷です、それは……」

村の西側、干し草置き場の横。

この村にただ一本の蜜柑の木の下で、子供は膝を抱えていた。

「おお……」

赤毛の少年が気まずそうに近寄る。

「悪かったな……」

「別に……悪くない。あなた、村を助けてくれたんだし、何を

要求してもいい……と思う」

「ふうん」

少年は子供の手首を掴んだ。

「じゃあ、謝れよ」

「何を…!!」

「ピントくれてごめんなさい、って謝ってみろ!!」

「…いや・だ…!!」

少年は暫く子供の目を見据えていたが、ふっと力を抜いて掴んでいた手も離れた。

「そうだ、自分の信念は貫け。お前はヒトを物みたいに扱つのを許さない。決して許さない。一生貫け!」

赤毛の少年は大きな犬歯を見せて、刻むように言った。ソルルは黙っていたが、その顔から目をそらさなかった。

「山を根城にしていた野党が、あの子の母親を要求しましてな…。その年は不作で…皆もつ疲れていました。あの子は…七つでした…」

族長は恥じ入るように、吐露した。村の惨い過去。

「郷司が野党討伐に動きましたが、時遅く、母親は戻らぬ者となっておりました。父親も昔に亡くして…。それ以来、村の皆であの子を育てていますが、心は頑ななままで…」

「母さんはこの木の香りが好きだった。遠い西の国から嫁いで来る時、この苗を持って来たんだ。満開の白い花の下にいる

と、春の妖精みだだった。だから、この木だけが、僕のため一つの宝物なんだ」

ソルカは蜜柑の木の幹を撫でながら、暗い草原を見やった。地平に細いオレンシの線が入り、長い夜が明けようとしている。

「……実がないな……」

赤毛の少年は、優しいカーブを描く枝々を見上げながら、聞いた。

「最後の一個だったのか？」

「うん、木守りの実……。冬の間、木を守って貰う為に、わざと一個残しておくんだ。でも、残しておいてよかった……」

ソルカは少年の方を見ないで、だんだん色付く草原を見ながら答えた。木がさわさわ揺れて、清い香りが漂う。

「なあ、お前、ソルカ……」

「……あなたが野党と違つのは分かる。叩いたりして悪かった」

「……俺と、来ない……？」

少年はソルカの横に立ち、一緒に朝焼けを眺める形になる。

「俺さ、人間で信頼出来る奴、欲しいんだ。子供の時だけじゃなく、一緒に大人になって、ずうっと側にいてくれる奴。お前

だったら、いてくれそうなきがして」

「……？」

子供は目を丸くして、赤毛の少年をマジマジと見た。

「信頼って……、ぼくら、今晚逢ったばかりだろ？」

少年は、銀の目に朝陽を湛えながらソルカを見る。

「一生のうちで、ずっと側に居ても心に残らない奴もいる。

ほんの一時しか居なかったのに、一生心に残る奴もいる……」

それから、正面向いて右手を差し出した。

「一緒に来てくれないか？ 俺、お前を必要になると思う」

その時のソルカにはどんな打算もなかった。ただ吸い込まれるように、このどの誰かも分からない、何処へ行くとも分からない少年の手を取った。そうして、二人を朝陽が照らした所で、空を影が覆った。

「やばっ!!」

少年が電気に打たれたように飛び上がった。

何かが目の前をよぎった気配がしたが、ソルカにはただ草原の風景が見えるだけだった。

さあ……と風が吹き抜け、蜜柑の木を揺らした。

赤毛の少年が、握っていた手を離して、木の反対側に駆けて行く。そこにはいつの間……？ 一人の男性がいた。

分厚いマントの下に豪華な鎧、額に金の輪兜。一目で身分あ

る武人と分かる。一体いつの間に？ 何処から来たのか？

少年はその男性の斜め前で、足先を揃えて敬礼した。家来なのか？

「今さっき、里からの鷹の手紙を受け取った。酷いもんだな」
その武人は、山の崩れた所を見て、素直な感想を述べる。

「あっ……あの……」
ソルカが慌てて進み出た。

「だけど、誰も下敷きになっていないんです。このヒトが、皆を逃がしてくれたお蔭です」

男性はギロリとソルカを一瞥する。押し潰されそうな威圧感に、子供はたじろいだ。

「そういう事は、族長に聞く。トルイ、案内しなさい」
「は……」

ここでソルカはやっと少年の名を知る。
ト・ル・イ、…雷(いかづち)かあ……。

そういえばタベ雷を呼んでいただけね、このヒトは事付きの陰陽師か、呪術師なのかな？ ほくみりちゅって年上くらくらいなのよ。

そんな事を考えていると、トルイはその男性を案内しながら、ソルカにお前も来い……と合図した。

さすがに族長クラスだと顔パスだった。

「だっ大王!!。モンゴルの、大ハーン!!」

皆々平伏する中、さっき不用意に話し掛けたのが誰だったのか…、ソルカの頭の中は真っ白になった。

「と…供も連れず、お一人で…？ まさか…？」

「陣中見舞いだ。追って王都から救援物資を送る。近隣から普請も寄越そう。皆、自棄やけ(を)起こさず、前向きに復旧に当たってくれ。命あって何よりだ」

王の一声で、鉛色だった皆の顔に活気が蘇る。こういうのって、早さが大事なんだ。機会を逸すると、大切な部族が離散し、自棄(やけ)から犯罪が生まれ、取り返しのがかぬ事となる。

見送りは結構…と、王は何故かまた、蜜柑の木の所へ戻った。

トルイはソルカを伴って着いて行った。

三人だけになる。

「ひ、ひ、トルイ……」

「は……」

「今回は、よくやった。やり方はムチャだが、他によい手もなかったろう」

「…カワセミのお陰です」

「そうだな、ハーンからも敬意を示そう」

ソルカは、王とトルイを交互に見ながら、所在なさげだ。

王と直に会話出来る陰陽師…。さっきの握手は、夢だったのか

ら…っ

「王…」

「なんだ」

「褒美が欲しい」

「…ほお…」

王がまたあの居竦める様な目を少年に向けたので、ソルカの方が思わず首をすくめてしまった。

「俺付きの、家臣が欲しい。信頼出来る、生涯共に出来る…」

「ああ、必要になるだろう。だが、まだ早い」

「今から育てるっ。こいつ…!!」

少年にいきなり手を引っ張り上げられて、ソルカは硬直した。

「トルイ、こいつって、ベツトじゃないんだ。第一、どこの誰

なんだ？ 親御さんは？ 子供のゴッコ遊びじゃないんだぞ」

王は呆れて言うが、何だかだんだん柔らかい感じになって行く。
く。

「どこの誰って…、ソルカだよ。三本ホックで村を護ろうとした。三本ホックで俺を護ってくれた。俺と共に来いって差し出

した手を握ってくれた。他に何か要る？」

ソルカは勢いに押されていちいち頷くが、成り行きに怯えている。

「ちょっと待って!!」

王は慌てた感じで二人を離した。

「トルイ、ちょっとこの子と話をするから、離れていなさい」

トルイは不満ながらも、言う通りに、蜜柑の木の向こうへ後退する。王は子供の目の高さまでひざまずき、肩に手をかけ顔を覗き込んだ。

「あの子は世間知らずで突っ走る所がある。実の所、どうなんだ？ 来る気があんのか？ ノリだけだったらヤメといった方がいいぞ」

王様の顔がすぐ近くにあって、その目に硬直する自分が映っているのが見える。クラクラしながらも、ソルカは頑張って意識を保って答えた。

「…行…きます」

「いいのか？」

「約束したし…、それに、ト…ルイ？ ほくを信頼してくれるヒトに、応えたい…って、思います」

「うん、そうか…」

王はチラと少年を見た。律儀に、話の聞こえない所で待っている。更に顔を近付けて、ソルカの耳元で囁いた。

「あいつ、お前さんの事、何も分かっちゃいないぞ。それでいいのかわ？」

「……………」

王が立ち上がった、トルイが呼ばれた。

「俺は国境へ戻らねばならない。狼の馬を借りて来たしな。ただ、この子供がお前と来るのなら、簡単に儀礼だけやっつといてやろう。その前に……」

王はトルイを子供の正面に立たせ、二人の肩に手を置いた。

「お前達、互いに信頼があると言ったが、人間の心のヒダは深い。お互いの全部が分かっている訳じゃない。今は隠しておきたい事もあるだろう。そして、露呈した事実には衝撃を受ける日が来る。どんな時も、信頼は揺らがな、と誓えるか？」

「……………」

「……………」

「分からないか？」

「誓えないけれど…努力する。俺、ソルカと歩きたいから」

「誓うって…そんな軽く言えない。でも、トルイと一緒に行き

たい」

「よし!!」

王は満足したようだった。

「口先だけの誓いは要らん。ちゃんと真剣に考える事が大事だ。

トルイ、剣を抜け」

トルイは身体に不釣り合いな、でっかい剣をシャリと抜いた。

「お前は…そうだな…」

王は、干し草置き場に刺さっていた三本ホックを引っ張り出した。

「これを持て」

トルイは剣を斜め上に掲げ、ソルカは三本ホックをそれに交わらす。間で王が大真面目に唱える。

「トルイ…、ソルカ…、お前達は、互いの人生を支え、委ゆだね、共に歩む。大地と風の名に置いて、王が証人となる」

トルイは大真面目に儀礼を受け、ソルカは良く分からないながらも、真剣な面持ちだ。

蜜柑の木がサワサワ鳴る。

「ああ、この木も証人になってくれるって…」

トルイがソルカを見て笑った。それを見てソルカも、緊張が緩んでちょっと微笑んだ。



「では俺は行く。トルイ、後は任せろ。出来るな」

「は……」

少年が敬礼して、王は蜜柑の木の影に隠れたかと思うと、突風が吹いて見えなくなった。

「……っ……王様は……っ」

「風に乘れるんだ、あのヒト。気にすんな、そういうの追い追いつかれる」

「……………」

トルイは小刀を取り出した。

「蜜柑の木って挿し木出来るのか？」

「え……」

「宝物だろ？ 連れて行かなきゃ。自宅の庭の一画へ引っ越し、お前にくれてやれると思う。陽当たりの良いト」な

「ホント？」

二人、井戸の方へ降りた。黒鹿毛と尾花栗毛が仲良く草を食べている。

族長がキョロキョロしながら歩いて来た。

「王はお帰りです」

「ああ……被害状況、細かく出る？ 城に持って帰るから、他の部落の長にも連絡して、提出して貰って」

「あ……はあ……」

「正確に頼むね。俺、一応任されたから」

「は……？ そなたが……？ はあ……」

別にいいのに、族長が他の部落の長も引き連れて来た。その中に、王の四番目の皇子の姿形を見知った者がいた。小さな囁きの内に緊張が走り、報告書はあっという間に完成した。

被害状況もまとまり、風前には出発の算段が付いた。尾花栗毛を勞りながらゆっくり駆けけても、明るい内に王都に戻るだろ。ソルカの住処（すみか）は埋もれてしまい、荷物と言っても、数本の蜜柑の木の枝だけだ。

「おい、忘れモン！」

「え……」

茫然と部落を眺めるソルカに、トルイが族長を目で差した。

「育てて貰ったんだ。村全体に礼を尽くせ」

「……………」

「礼儀知らずは要らんぞ」

「……でも……母さんを……」

「お前の母さんが、外国（とくに）から嫁いで、愛して、護ろうとした村だ。だからお前も護ろうとしたんだろっ？」

「……うん……」

「じゃあ、ちゃんと別れろ。今やっとなきや後悔する事は、世の中に御満ごまんごある。それは俺が保証する」

ソルカはトルイをマシマシと見たが、やがて頷いて、族長や村人達の所へ駆けて行った。

そうして育てて貰った礼を言って頭を下げると、冷たいと思っていた大人達が涙ぐんで、自分の先行きの幸を願ってくれた。それから、蜜柑の木の世話は必ず怠らないと、約束してくれる人もいた。

このヒトに着いて行くという、自分の判断は間違っていないかった……。

尾花栗毛に揺られながら、赤毛の少年の横顔を見る。栗毛優しき馬は、トルイの姉の馬だという。このヒトに似ているのだらうか？

栗毛が疲れると降りて歩いたが、そんな時はトルイも青鹿毛を下馬して、二人肩を並べて歩いた。そうしてゆっくり、新しい人生のある王都へと向かう。

ソルカは色んなモノに感謝した。

外国(とつへに)よりこの地に来てくれた母、旅先でその母を

見初めたという記憶の片隅の父、自分を育ててくれた村、蜜柑の木、……このヒトに逢わせてくれた、運命……。

感謝する事なんて、忘れていた……。

飲みかけの葡萄酒が、膝に滴り落ちる。テーブルの上には、取り落として引っくり返った盃。

蒼の狼は、半笑いで王を見た。

「い、嫌ですわ、王君……。冗談が過ぎます……」

テーブルに差し向かいの王は、澄ました顔で盃を掲げる。

「冗談で乾杯する程、暇じゃあない」

「何を、そんな、急に……。あの子はまだほんの子供で……」

「来年には、俺が、君と出逢った年齢だ」

「……」

王は新たな瓶を開けて、狼の盃に葡萄酒を注ぎ、ニヤニヤしながら言う。

「お互い生涯一緒にいたいっつーから、簡単な儀式をして来てやった。後は君に紹介して、正式な式典……身内だけでいいか。

あ、君が祝福する？ まあ、奴にしてはよくやったよ。ちゃあんと自力で見つけて来た」

「はあ……あの子が……」

狼はテーブルに肘を付いて、額に手をやった。

「子供ってのは、大人が考えているよりずっと早く、駆け足で大きくなる。君の口癖だろ？ 観念して乾杯しよう」

狼は、うつむきながらもきこちなく微笑んで、盃を掲げた。

「ただ、ちょっと問題があるんだ……」

「何です？」

母親は盃を持ったまま真剣な目を上げる。もうこうなったからには、大概の事は融通してあげなくては…。

「トルイの奴、まだ気付いていないんだよなあ。儀式をした相手が、女の子だったって事に…」

再び葡萄酒を引っくり返す狼を眺めながら、王は、すっこい楽しそうに笑った。

くおしまい〜

二〇〇九・一〇・某

